

「出家と家族」

長谷川琢哉

HASEGAWA Takuya

10代後半から20代前半にかけて、私は精神的な危機にあった。思春期特有の悩みに由来するものだったと思われるが、とにかく落ち込み気味で気分が悪かった。ただ、今から考えると、それは精神的なものというよりも、ホルモンバランス等の生理的な問題が多分に影響していたのかもしれない。

いずれにせよ、その頃の私はひとつの強迫観念にとらわれていた。それは「永平寺あたりの禅寺で出家しなければならない。そうでなければ、修験道の修行に行くしかない」というものだった。今から考えると全く意味不明である。そもそも脈絡がわからない。しかし当時の私はなぜか深刻になっていて、とにかく「出家しなければならない」と思っていた。宗教に関する本（当時は「精神世界」という言葉もよく使われていた）を手当たり次第に読んだり、スピリチュアルな雰囲気のあるサブカルチャーにハマったりしていた。ちょうどその頃、オウム真理教の一連の事件があって、全く他人事とは思えなかった。とはいえ私は最終的に出家することなく、その代わりに（それは文字通り「その代わり」だった）宗教の研究をするようになっていた。

あの頃の「出家」への衝動はなんだったんだろう、と思う。子供から大人へと成長する過程で「イニシエーション」を必要とする社会がある、といったことが人類学などで言わ

れるが（当時その手の本をよく読んでいた）、それは人間にとって普遍的な衝動なのかもしれない。私の場合は「家族」に代表されるような煩わしい世俗から離れて、それとは別の世界に触れたいという気持ちはあったように思う。要は「家族」や社会を相対化しなければ、生きていくことが出来ないと思っていたのだろう。その時、タイミングさえあっていたら、私もいわゆるカルト教団で「出家」していたかもしれない。

翻って考えると、現在の日本仏教、とりわけ真宗のあり方は不思議である。仏教の教えを伝えながらインドで始まった出家という形態をとらず、寺院は主に世襲で、つまり「家族」によって受け継がれている。親鸞仏教センターの私の同僚たちの多くは寺院の生まれで、「宗教二世」ならぬ「宗教十何世」という方も少なくないそうだ。この事実をどのように受け止めればよいのだろうか。もちろん出家に対する真宗の教義的な説明については、私も多少は理解しているつもりである。しかし仏教というものが、原初的に「出家」への志向をもつものであるとするならば（言うまでもなく親鸞も一度は出家している）、「家族」が単位となって仏教を伝えるというねじれについて、当事者である同僚たちは何を思うのだろうか。何百年も続く寺院を維持する責任を負っている（あるいは負わされている？）彼・彼女らに、ぜひともこの問題を論じていただきたいところである。